原　著

早期体験実習（early exposure）としての高齢者施設体験実習の現状と課題 －アンケート結果を中心に－

白澤文吾，藤宮龍也，瀬川　誠[1)]，上田真寿美[2)]，松井邦彦[3)]

山口大学医学部附属医学教育センター　宇部市南小串１丁目１－１（〒755-8505）
山口大学医学部附属病院医療人育成センター[1)]　宇部市南小串１丁目１－１（〒755-8505）
山口大学教育機構学生支援センター[2)]　山口市吉田1677－１（〒753-8511）
熊本大学医学部地域医療システム学[3)]　熊本市中央区本荘１丁目１－１（〒860-8556）

Key words：初年次教育，早期体験実習，early exposure，高齢者施設体験実習，卒前医学教育

和文抄録

医学生に対する入学後早期の体験実習（early exposure）の重要性が叫ばれて久しい．山口大学では，入学後間もない医学科１年生にEarly exposureの一環として，高齢者施設体験実習を行っている．その現状と課題について，実習後の学生アンケートの結果を中心に若干の文献的考察と共に報告する．

アンケート結果等からは，体験実習を行った学生，施設の双方に好意的に受け入れられていた．また，我々が期待した介護現場の現状を体験することができたと回答した学生が88%に上った．

その一方で，施設，学生，大学のそれぞれの立場からの問題点が挙げられた．これらの問題点を改善しながら，より適した実習体制を今後確立していく必要があると思われた．

はじめに

医学生に対する入学後早期の体験実習（early exposure）の重要性が叫ばれて久しい．早期体験実習は，「医学教育の早い時期に医学・医療の現場に接し，動機付けを試みる教育方法」とされ，医学生としての人間性を養い，学習意欲を向上させ，教育上の意義は大きいと考えられている[1)]．また，超高齢化社会の到来，社会保障費の増大，さらに介護保険の導入等，医学生に対する教育内容も，時代の流れに応じた変革が求められている．山口大学では，入学後間もない医学科１年生にearly exposureの一環として，高齢者施設体験実習を行っている．その現状と課題について，実習後の学生アンケートの結果を中心に，若干の文献的考察と共に報告する．

対象と方法

山口大学医学部医学科では，入学後間もない１年生を対象とし，共通教育の前期カリキュラムで医学入門（４単位）（表１）を実施してきた．今回，平成26年度入学の医学科１年生107名を対象に，高齢者施設体験実習を行った．実習の対象施設は，山口大学近辺の老人保健施設を中心とし，一施設あたり２～３名の学生を無作為に割り付けた．実習内容は，ほぼ１日にわたる介護体験型実習であり，実習前には，社会福祉制度，介護保険制度等の事前学習を講義・演習等で十分に行った．実習当日の朝は，頭髪

平成26年９月４日受理

や爪の長さ等の身だしなみだけではなく，学生の体調についての確認を行った後に，各施設に配属した．

学生の評価は，学生から提出されたレポートへ教員がフィードバックを行うことによる形成的評価と，各施設責任者からの形成的評価を併せて行った．

実習終了後の学生へのアンケートは，質問紙法の無記名回収式で施行した．質問は，あらかじめ選択肢を提示した５段階の評定尺度を用いたものと，自由記述による意見や感想の回答を依頼した．倫理的な配慮として，各学生には回答は無記名の任意であること，成績評価には影響しないこと，匿名の形式で結果を学術雑誌や学術集会で発表することがある点を，書面と口頭で伝え了承を得た．

表１　平成26年度医学入門の授業構成

回	通算コマ数(1コマ90分)	講義内容
1	1,2	総合オリエンテーション・SGD
2	3,4	科学題材を基にしたSGD
3	5,6	医学部附属病院見学
4	7,8	医学部附属病院見学を基にしたSGD
5	9,10	心肺蘇生演習・医学部図書館ツアー
6	11,12	医学概論序説・Professionalism
7	13,14	倫理教育（1）
8	15,16	解剖実習・ドクターヘリ見学
9	17,18	倫理教育（2）
10	19,20	解剖実習を基にしたSGD
11	21,22	高齢者施設体験実習オリエンテーション
12	23,24,25,26,27	課題実習(医療の国際貢献、共有地の悲劇等)
13	28,29,30,31,32	高齢者施設体験実習
14	33,34	高齢者訪問体験実習を基にしたSGD
15	35,36,37,38	フレッシュマンセミナー・特別講演会

SGD; small group discussion

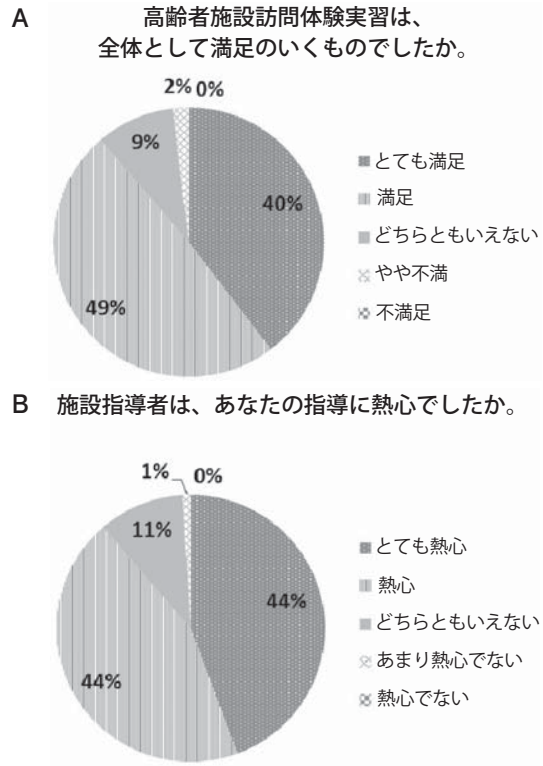

図１　学生へのアンケート調査回答（１）

A.「高齢者施設体験訪問実習は，全体として満足のいくものでしたか．」との問いに，「とても満足」「満足」との肯定的回答が89%と高かった．

B.「施設指導者は，あなたの指導に熱心でしたか．」との問いにも，「とても熱心」「熱心」との肯定的回答が88%であった．

結　　果

学生へのアンケート調査票の回収率は，99.1%（106/107）であった．

「高齢者施設体験実習は，全体として満足のいくものでしたか．」との問いに，「とても満足」「満足」との肯定的回答が89%と非常に高かった（図１－A）．また，「施設指導者は，あなたの指導に熱心でしたか．」との問いにも，「とても熱心」「熱心」との肯定的回答が88%であった（図１－B）．さらに，「あなたはこの施設での実習を，後輩に推奨したいと思いますか．」との問いにも，「とても思う」「思

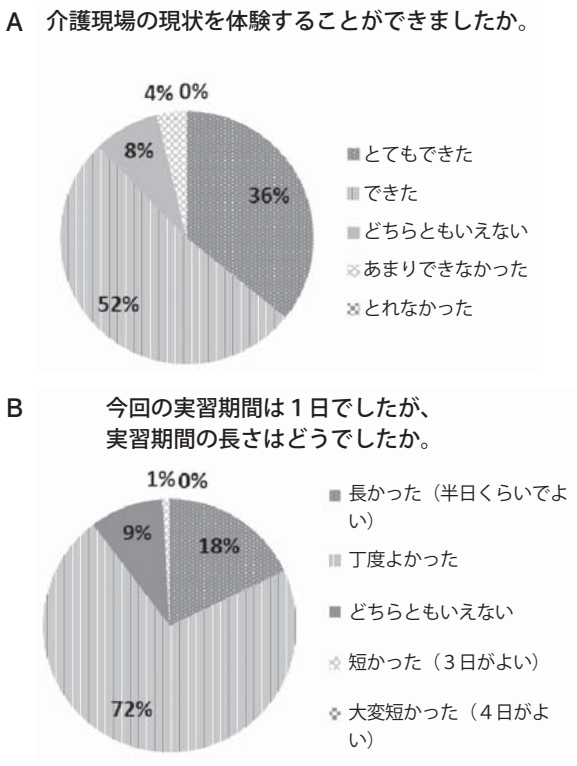

図２　学生へのアンケート調査回答（２）

A.「介護現場の現状を体験することができましたか.」との問いに，「とてもできた」「できた」との回答が88%であった．

B.「今回の実習期間は１日でしたが，実習期間の長さはどうでしたか．」との問いには，「丁度よかった」との回答が72%であり，「長かった（半日くらいでよい）」との回答が18%あった．

表２　学生へのアンケート調査の自由記述回答

【良かった点】

- 医療は、全てチームであると実感した。
- 医師とは違う職種について知ることができた。
- コミュニケーションの難しさを、身をもって体験できた。
- 高齢者と触れ合えて、高齢者と関わることの難しさを知ることができた。
- 普段行くことのない施設の体験ができ、その中で医師の働きを見ることができ意欲がわいた。

【改善すべき点】

- 施設ごとの体験内容の違いがあまり無いほうがいい。
- できれば一施設だけではなく、複数施設の現場を見ることができればと思った。
- 高齢者と会話するだけで終わり、介護らしい介護（移乗や入浴介助など）ができなかった。
- １年前期のことなので「介護」というより「医療」というイメージで捉えてしまい、医療全体の中で介護がどういうものなのか理解し辛かった。

う」との肯定的回答が88%を占めていた．これらの回答より，本実習への学生の満足度は総じて高かったと思われた．また，我々が期待した「介護現場の現状を体験することができましたか．」との問いに，「とてもできた」「できた」との回答が88%に上り（図２－A），全員ではないものの介護現場の現状を体験した学生が多かった．その他に，「今回の実習期間は１日でしたが，実習期間の長さはどうでしたか．」との問いには，「丁度よかった」との回答が72%の一方，「長かった（半日くらいでよい）」との回答が18%あった（図２－B）．

自由記述回答で，良かった点は，「医療は，全てチームであると実感した」や「コミュニケーションの難しさを，身をもって体験できた」などがあった．改善すべき点は，「高齢者と会話するだけで終わり，介護らしい介護（移乗や入浴介助など）ができなかった」などがあった．主な自由記述の回答は表２にまとめた（表２）．

施設からの当実習への振り返り自由記述意見には，本実習への好意的なコメントが多かった．

考　　察

医学教育における早期体験実習の重要性は広く認識されている．全国の医学部では，将来医師として働く際に必要な，患者との良好なコミュニケーションができる能力を身に着けることを目的に，医学専門教育導入前に様々な早期体験実習を実施しており，その効果については多数の報告がある[2-4]．また早期体験実習の満足度の要因としては，自分の果たすべき役割が明確で将来へ活かせる経験であること，見学者ではなく，相手の役に立つ実体験ができること，コミュニケーションの成立など達成感が得られることの三点に集約できるとした報告がある[2]．現在，山口大学では，１年次医学入門において高齢者施設体験実習，３年次地域包括医療修学実習において県内僻地診療所等での実習を臨床実習前の早期体験実習として行っている[5]．その中でも高齢者体験実習は「患者の心を知る実習」として，大きな教育効果が期待されている[2]．

今回，医学科１年生を対象に行ったこの高齢者施設体験実習は，実習を行った学生，受け入れた施設の双方に好意的に受け入れられていた．当大学では，本実習の一般目標を「医師としての自覚を養うために，福祉の現場を体験することを通じて，社会における保健・医療・福祉の役割を理解する」と定め，さらに「高齢者の生活のあり方を概説できる」，「介護の仕方を詳述できる」，「現代社会における福祉の課題を列挙できる」といったことを行動目標としている．これらの目標を定め，学生自身が明確な目的意識を持たず，知識もないまま，漠然と実習に参加することがないよう，事前学習課題として，「介護保険制度の概要と問題点」，「高齢者向けの介護福祉施設および関係職種の種類とそれぞれの特徴」について概説し，各人が課題レポートを提出することを課している．更に実習を行うに当たっては，学生に経験して欲しい項目をチェックリストとして作成し，リストには，「一般会話」「食事介助」「入浴介助」「排泄介助」「移動介助」「レクリエーション」「生活環境」の７項目とそれぞれに小項目を設け，これらの項目を経験できるよう積極的に学生自らが行動することを促した．

また本実習は，１年次医学入門の終盤に行っており，それまでに医療倫理やコミュニケーションスキル等の演習等や，解剖実習見学，医学部附属病院見学等を行った後に組まれている．これは，高齢者施設体験実習について，学生の準備学習を促すだけではなく，目的意識を高め，その上で教育効果が高まるのを期待して，全体のカリキュラム中での学習順序にも配慮したものとなっている．

しかしながら今回の実習を振り返ってみて，いくつかの問題点が挙げられる．

先ず施設側からは，通常の業務に加え，あまり接点のない医学生を指導するため，現場のマンパワー

不足や戸惑いは否めない．さらに，実習内容や指導方法への不安，医療安全の問題，さらに実習を行う学生のモチベーションの個人差などが挙げられる．これらを解決するために，医学教育センターでは，頻回に受け入れ施設と連絡を取り合うことに努め，円滑なコミュニケーションを保つよう心掛けた．また今後は，大学と施設側の双方で，実習内容や評価項目を検討し，教える側の指導能力を高めるFD（Faculty Development）等を行い，指導法等の修得だけではなく，教育を依頼する大学との信頼関係を確立する必要があると思われた．

次に学生側からは，入学後初めての学外実習であることに加えて，地方ならではの実習先への交通手段や交通費の問題が挙げられた．今回は施設への交通手段としてタクシーを利用したが，予算の問題もあり今後も同様にすることができるとは限らない．このような，地方大学における大学病院外の実習に伴う交通に関した問題は，解決策を見つけることは容易ではなく，引き続き努力を要すると思われた．さらに，実習期間の問題がある．以前は２日間実施していた実習期間を今回は１日とした．これはカリキュラムの中で，医学入門に盛り込むべき内容が増えたことや，以前より２日間は長いとの学生の声があり，試験的に１日の実施としたものである．アンケート結果からは，72%の学生が１日の実施が丁度良いと回答しているが，今後さらに検討を要する課題であると思われた．

最後に，教員の立場からは，学生の服装や身だしなみ，マナーなどの基本的な態度に関した指導の必要性が挙げられた．これに対しては，実習前に十分なオリエンテーションの時間を設け，実習の目的・意義を明確に伝え，学生の理解を促した．特に服装・頭髪・爪の長さ等の身だしなみに関しては，実習前のオリエンテーションで説明するだけではなく，実習当日の朝に，教員が直接確認を行った．また前述の様に事前学習に加え，実習後には，個人レポートの提出および少人数でのグループ討論を行い，コミュニケーション教育の一環とし，２年次以降のPBLチュートリアルなどの小グループ学習の準備教育にも通じるようにした．さらに，移動時間を含め限られた時間内で円滑に実習を行うことが出来るよう，大学近隣の実習受け入れ先の確保に苦心した．充実した実習を期待する一方で，受け入れ先の業務に支障をきたさないようにするため，一施設当たりに受け入れを依頼する学生の人数にも，配慮を要した．

以上，諸々の問題があるものの，高齢者施設体験実習は貴重な学習の機会であり，その学習効果を更に上げるために，カリキュラム全体を見通した上で，今後も引き続き努力する必要があると思われた．

結　　語

１．医学科１年生を対象に早期体験実習（early exposure）の一環として高齢者施設体験実習を実施した．
２．学生へのアンケート結果からは，総じて満足度の高い体験実習になった．
３．施設，学生，大学のそれぞれの立場からの問題点が挙げられた．これらの問題点を改善しながら，より準備教育に適した実習体制を確立する必要性があると思われた．

謝　　辞

本実習にご協力頂きました実習施設関係者の皆様および学内関係者の方々に深く感謝致します．

引用文献

１）江村　正，大坪芳美，小田康友，ほか．医学科早期体験実習の変遷と課題．佐賀大学全学教育機構紀要　2014；2：51-56.
２）大坪芳美，酒見隆信．医学科１年早期体験実習における実習の効果度と満足度の比較検討．医学教育　2011；42：1-7.
３）柳　久子，戸村成男，森　淑江，ほか．医療・福祉現場における早期体験実習（early exposure）－筑波大学医学専門学群における経験－．医学教育　2002；33：43-49.
４）後藤道子，津田　司，横山和仁，ほか．振り返りを伴った早期医療体験実習の教育効果について－１年を通じたプロフェッショナリズム育成の場としてのearly exposure－．医学教育　2009；40：1-8.
５）白澤文吾，藤宮龍也，松井邦彦，ほか．山口大

学医学部近郊の各診療科同門診療所を中心とした地域医療実習の試み．山口医学　2014；63：147-151.

Current Status and Issues of Practical Training in Welfare Facilities for the Elderly as an Early Exposure for Medical Students.

Bungo SHIRASAWA, Tatsuya FUJIMIYA, Makoto SEGAWA[1], Masumi UEDA[2] and Kunihiko MATSUI[3]

Center for Medical Education, Yamaguchi University School of Medicine, 1-1-1 Minami Kogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan 1）Career Development Center, Yamaguchi University Hospital, 1-1-1 Minami Kogushi, Ube, Yamaguchi 755-8505, Japan 2）Student Support Center, Organization for University Education, Yamaguchi University, 1677-1 Yoshida, Yamaguchi 753-8511, Japan 3）Department of Community Medicine, Kumamoto University Hospital, 1-1-1 Honjo, Chuoh-ku, Kumamoto 860-8556, Japan

SUMMARY

It has long been considered important for medical students to undergo practical training early after admission to medical school（early exposure）. At Yamaguchi University, as a part of early exposure, we have been providing first-year students with an opportunity for practical training in welfare facilities for the elderly shortly after admission to the school of medicine.

Here, we report the current situation and problems encountered in early exposure, along with the literature on this topic and the results of a questionnaire completed by the students after training.

According to the survey results, the training experience has been well accepted by both the facilities and the students. As many as 89% of the students were satisfied with the practical training experience, as expected.

However, some problems were encountered from the point of view of the facility, the students, and the university. We need to address these problems to establish a better training system.